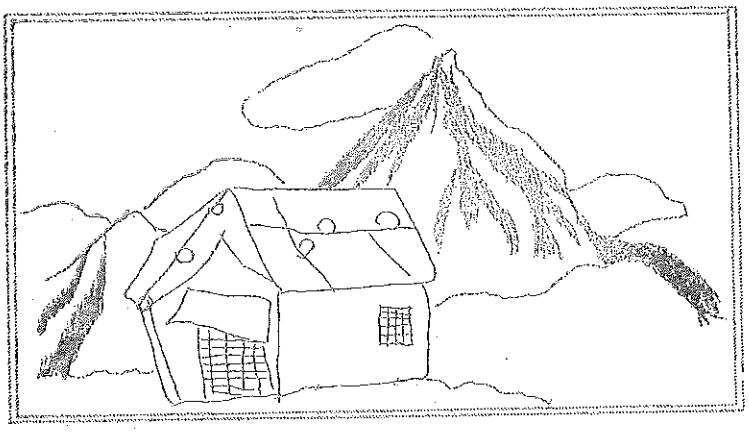
# 西 朋

Tourenbericht



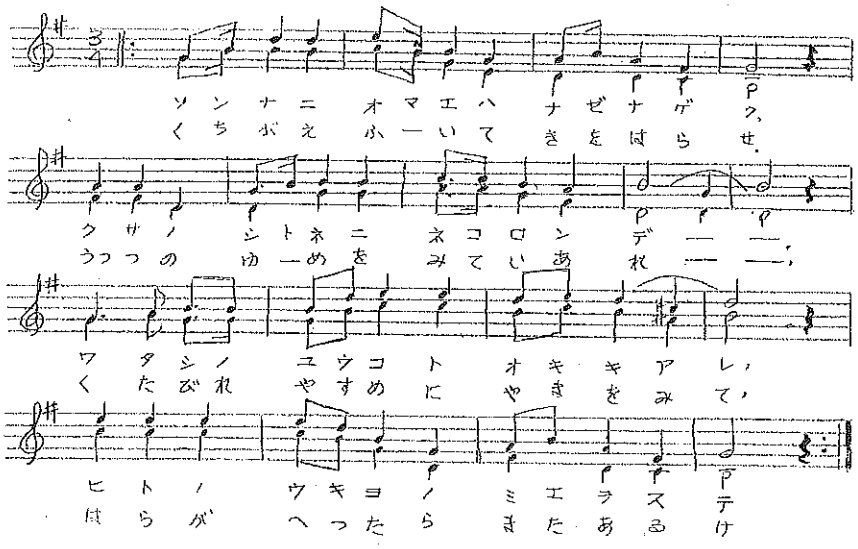
4

都立西高OB山岳会

# 目次


八方尾根（三月）笹田……（一）
新人歓迎会（四月）山中……（二）
谷川合宿（五月）平沢……（四）
谷川一ノ倉ニルンゼ（七月）鈴木……（五）
夏山　剣　槍縦走（七、八月）田中　実……（六）
〃　笠　〃（七、八月）福田……（七）
〃　涸沢生活（七、八月）岩崎……（八）
山行抄（四月～八月）……（九）
新役員　紹介……（十）
全会員の氏名住所等　紹介……（十一）


## 彷徨の唄




時の調子如何　途中で不時着の場合が往々にしてある。しかしゲレン

# 八方尾根

一九五四年三月四日～九日

P、山田、鈴、笹田英次、成瀬恭座

共同装備　ナイロンテント(一)(二)　バーナー(二)　アルコール若干、コッフェル(一)

個人装備　ピッケル、アイゼン、スキー一式

(三月三日)(水)　新宿(二二一五)――笹田、成瀬出発

(三月四日)(木)　雪

信濃町谷(〇八二〇～三〇)――細野(〇八四五)――丸山氏宅(〇八五五～六九三〇)雪の少いのに驚く。あわたゞしくバスに乗り細野まで、一まず荷をおろして昼食前にひとすべりに出かける、泣山ゲレンデは不能のため咲花ゲレンデへ雪こそあれ状態悪くガチガチでとても滑りにくい、ころんだときの腰のいたさは氷式蹴球でもやっている様な感じ、この頃から雪が降り出す、昼食後に行った時はずっと滑り良かった。この日は思い切りころんで明日こそはの気持で床についた。

(三月五日)(金)　くもり　新雪三〇cm

昨日一緒中降ったゝめ一面銀世界　ゲレンデまでラッセル同様やっとこせとゲレンデにつく。先客三名　ゆったりとすべることが出来たが、陽が高くなるにつゞ混んで来る昼近くには満員になった、立教ワンダーフォーゲルの大パーティが目立つ、上手なのあり下手なのあり他人の滑るのを見ている時が一番たのしい、午后は雪も適当にふりかためられて　とてもすべりよかった。特に最上部からの直カリはこの上もないが、一番下まで順当につけるかどうかは　その時の調子如何　途中で不時着の場合が往々にしてある。しかしゲレンデの小さい事が何としてもくやまれる。

(三月六日)(土)　晴

今日はゲレンデの最后の仕上げ　ゆっくりと遊ぶ、回転に力を入れるが、スキーの奴　俺の云う事を全然きかない、こんなときには最上部からの直カリこれは清涼剤になるものらしい、ゲレンデはますます混んで来る。しまいには　すべるのに場所をさがす様であった。天気が良かったので写真をとる。あまり疲れて明日にさしつかえる事のないように少し早めに練習を止める、今晩中にザックをしっかり梱包しておこう。

(三月七日)(日)　小雪

山田善(〇八四五)出発(一一〇〇)――駒止の小屋(一二四〇)～(一三二〇)――黒菱小屋(一五一〇～一六四〇)――黒菱の頭テント場(一七三〇)

朝食をすませた頃山田氏が来る。大分遅くなってから出発　小雪の降る中を重い荷を持って(予想より重いの意)雪の中を歩くのはあまり楽な仕事ではない。谷道を行く。駒止の小屋までは楽に行くことは出来たが、こゝで荷を下して昼食をとると　もう進むのがいやになった。こんな所から駒止の小屋と云う名が出たのかな　勇と鼓して進む　山田氏がやゝ遅れぎみ前夜発で来たので疲れて居るのであろう。我々二人はコンディション上々、エネルギーは余りぎみ(但しこの頃は)黒菱の小屋でゆっくりと休む　もっとも休みすぎてしまい黒菱の頭にテントを張るころは陽も落ち風が強く吹いていて寒いことこの上もなかった。テントの中にもぐり込んだ時はホッと一息　テントの中は天国　腕飯もすぎ、夜食もすんだ後はねるばかり今日の黒菱の小屋から頭ま

での行程のつらさが思い出された。

〔三月八日〕 霧、小雪

AC（〇八〇〇）――オ一ケルン（〇八三〇）――オニケン（〇九〇〇）――オ三ケルン（〇九三〇）～一〇〇〇）――テント帰着（一一〇〇）撤收（一二三〇）――黒菱小屋（一三〇〇）

山田負傷山田成瀬（一四〇〇）笹田（一四三〇）出発――細野（一六〇〇）――バス停留所（一七一〇）→山田成瀬は松本へ、

早く起きる筈が寝心地が良かったゝめ　ねすごしてしまう。食事を取り早々に出発オ一、オニと順調に進む、オニケルンをすぎる頃から風が強く吹く。ガスのため日光が淡い。尾根すぢの雪は実にきれいだ、淡い光と陰が絵のように交叉している、そんな中を　ひざ位迄もぐりながら進むオ三ケルンにつくと風は益々強くガスは深く、その上雪だ。合議の末登頂をみあわせて帰ることにする、スキーをつけて滑る。雪質は今までとはぐっと違う。第三ケルンをあとにしたとたんに成瀬君がスキー折損。残った二人だけで滑って行くが歩いている人の方が早い位だ。ガスで視界がぐっと狭い。前を滑る山田氏を追いながらやっとの事でテントにつく。テントがすぐそばにあるのに　なかなか見えなかったから妙だ。こゝで又合議の末　乙とまず細野へ引きあげる事にする。テントを取りはらい後をかたづけて黒菱の頭に別れをつげる。黒菱の小屋へ行く途中山田氏が荷を下してゲレンデで滑ったが、転倒足首を骨折、慌てゝ小屋にかつぎ込んで仮の手当を施した後、人夫の方に山田氏をかついで下してもらう。山田氏の荷物は持ち切れず小屋に置いて行く。成瀬君に山田氏のつきそいを頼み、後を整理して荷物を頼み追いかける。荷が肩にくい込むのをがまんして尾根を降る。相当歩いてから山田氏に追いついた。大変痛そうに見えるが、大町まで下らねば医者は居ない。丸山氏宅にかけこんでバスの時間まで待たせてもらう、成瀬君につきそって下山してもらう事にし、バスの停留所まで行く。明日荷物を取りに黒菱を往復する予定。

〔三月九日〕（火）晴

昨日の疲れですっかり寝すごしてしまった。起きると非常に良い天気であった、空身なので　いそいで泊尾根を登る。景色の絶佳をたゝえながら行く　遠く槍平、戸隠、妙高が眺められる　近くには五竜岳、鹿島槍ヶ岳が見られる。道々雪を売り乍ら行くが一人なので足は早い。小屋で昼食を取り、荷を梱包する。それからゲレンデで滑る。こゝのゲレンデは急勾配でスピードが非常に出る。荷物をかついで小屋を出ようとすると、黒菱の頭で怪我人がいるとかで急いで行き小屋までかつぎ下し、手当を加へ小屋を離れる　尾根経を歩いて下るつもりであったが、雪を見たらすべりたくなり急な尾根を滑って下りる。転んだ回数などおよそ見当がつかない。丸山家でゆっくり休み　山田氏の荷物だけを残して学校の装備等をかついで帰る　疲労は非常にこんで居た。新宿に着いた時は暗く感じた。

細野（〇九三〇）――黒菱小屋（一一〇〇～一三二〇）――細野（一四〇五）――バス停留所（一七一〇）――新宿翌朝着

（後　記）

山田氏が足に負傷した事は疲労から来たものと思れるが　こんな所は勘人の非しさだろうか、

成瀬君には大変迷惑をかけてしまった。又その際黒菱小屋の主人と人夫の景田さん　それに丸山忠雄さん　又黒菱小屋に滞在していた人々には非常に親切にしていただいた。尚又鉄道関係の人々には、大切な

あつかいを受けたと云う。これらの方々には大いに感謝します、我々としても今後とも怪我をしない様に努力したいと思いますし、又人が怪我をした場合には大いに助けてあげるべく努力しようと思います。　もう一度いや何度でも八方尾根へ行って見たいと思うし、皆にも是非行かれる事をおすゝめする。景色のよさ　スキーの楽しさは、この上もない、但し転ぶことは当り前故あきらめるとしよう。

〜〜（笹田　記）〜〜

## 新人歓迎会

川苔山集中登山林道班報告（山中　記）

期日　四月二十九日

パーティー（マ）山中　（川口）（南波）　他現役二二名　松本先生

コース　林道――百ひろの滝――塩地小屋――川苔山――懇親

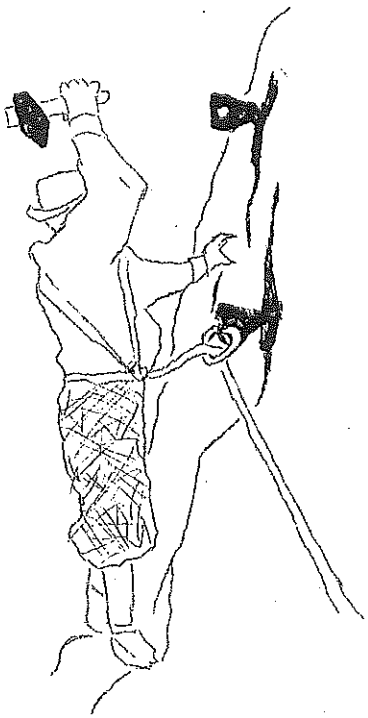
新人歓迎会は慣例の川苔山と今年も定り四月二十九日現役　名と一緒に立川をたつ。

川苔谷出合からオーダーを定めにぎやかな行列が続く。全員の半数が小さなザックを背負い後は手ぶらと云う到って軽い装いで陽春の暖い陽差しを浴びて思い思いに〝山〟の味を吸い込む、出合から一時間余りで百尋の滝に出る。ある者はカメラを取出し又ある者は、「あ」「い」「こ」「ま」「が」と眺めいっている様子、でこゝからの二十分程の登りに　のびてしまった人もいたが小屋に着く頃には全員元気快復　途端に空腹を感じるのだった。　先着の田中(ミ)さん、福田さんに迎えられマナイ沢班、大倉沢班の到着を待つ。一時頃全メンバーの顔も揃い持参の弁当を開き山の空気をおかずにおいしい昼食をとる、珍客南波さんのリードでコーラスを静かな谷のせゝらぎと競う。

いざ今日の目的地川苔山へと元気に向う現役は黙々と　OBはガヤガヤと。　踊平を過ぎる頃より隊伍は乱れファイトのある人は山頂迄の登りをかけ上るし先生は下痕れた人は最后の登りを固いて、心一安心した様子だった。残ったお菓子を平げしばしの休息の後、川苔山頂で記念撮影を行い帰途につく。〝山の神〟　でこれも慣例の一休みをして山に別れを告げた。

〔後　記〕

今年も新人歓迎会を無事終了したが何か忘れものをした様な気がした。現役との連絡が良くとれなかった為にかコンパの準備もせず各自たゞ手弁当をぶら下げて塩地小屋にそして川苔に出掛けたが、私としては　たとえどんな貧しいコンパであるにしろ新人を歓迎する意味に於ても亦新人部員の一人〳〵により多くの思い出の種を生んだ山行として心に刻まれる様にと願っていたゞけに　もの足りなさを感じたのであろうか。　全体を通じてどこかまとまりのない山行だったように思われた。



◎谷川岳マチガ沢合宿◎

期日　五月二日――三日

参加　L平沢　SL田中実）　鈴木　成瀬　福田

第一日　快晴平穏ガス

土合（〇五一五）――マチガ沢旧道出合（〇六二〇）――出発（〇七三〇）――スキー（〇七五〇――一〇三〇）――帰幕（一〇四五）――出発（一三二〇）――グリセード（一四〇五――一五三二）――帰幕（一五五五）

最終列車で出発、会員氏の好意で一番に並べたが、すごい混雑でまごまごしているうちに二対三に分れて乗車することになってしまった。そのため土合で人数を揃えるのに手間取り歩き出すのが最後になったので、どんどん追ばし十パーテイほど追い越して首尾よく中の島の予定した地点に天幕を張ることが出来た。到着してから朝食を喰い出すまで二十分と云うのは、ほめられても悪くないと思う、腹をこしらえて直ちにスキーに出発した。最初に当然に出たところで先ずスキーをはく、気負って出て来たものゝ、いざ雪の上に立つと自称も他称も皆うらみつこなしに下手なので安心した。スピードが丁度出ないのでS字の下を登ってみたが、シュカブラがひどくて手に負えないのと、コーチに予定していたYが来なくてろくな練習が出来ないのとで、すぐにあきてしまい午前中の時間を浪費するのに苦心する始末だった。

昼食後調子が出ないのは夜行で眠れなかったためと考え昼寝をすることにした。予定時間に起きられるかどうか心配したが、丁度に目を覚まし、意気を新たにして出発。ガスが立ちこめて、もう他のパーテイが降りて来る中を登るのは妙な気分である、通称二ノ沢で転倒停止とグリセードの直滑降の練習を各十回ほど行った。全員グリセードは初めてと云ってよい位であり、一寸信用出来るのが自分だけだと云うのでは、自然小生が后について登り最初におりると云う形式をとらざるを得ず、回数を多くすることが出来なかったのは止むを得ぬことだろう。時間がなくて充分練習出来なかったうらみはあるが、雪が案外締っていたのでスピードに対する自信は得られたと思う。薪をひろいながら帰幕した。

夕食後小生と丁で土合へ煙草を買いに行く。

第二日　晴後曇

出発（〇七〇五）――アイゼン着（〇七四〇）――沖の耳（〇九四〇――一〇〇〇）――一ノ倉岳（一〇五〇――一一三〇）――芝倉沢旧道出合（一二三〇）――帰幕（一三四八）――撤收（一四一〇）――土合（一四四二）

最初同ノ沢を登るつもりだったが、S字で偵察したところ本谷にブロックが無いので、本谷を登ることにした。シンセン沢出合の本谷のデブリのでアイゼンを着け、しばらくアイゼンワークを練習し、そこから支尾でキシクステップしながら登った、途中右手の水の出ているところで一休したが、それ上にシュルンドの大きいのがあり巻いてトラバースするところが一寸悪かった、本谷はガニマタのバケツステップが切ってあり、全然面白くないので、なるべくステップに入らない様に心懸けた。キシクステップは全員平等にやらせるつもりだったが、身体の調子の悪いものがいたりして、主に丁にやらせてしまったのは練磨にはなったろうが失敗だった、考えていたほど傾斜が急でなかったので或はアイゼンは不要だったとも思う。

陵線歩きは例の如くで別に書くこともない。

一ノ倉岳で昼食。

芝倉沢は……全く意外にも、すごい地こすりが出ていて、雪渓は泥だらけで、又雪もマチカに比して少なさの割合が大きく、グリセードの非快適さを考えさせられた、二十米位のピシチでおそるおそる下ってみたがミユルンドは無さそうなので、前日出来なかった、立ったまゝの停止、斜滑降等をやりながら降りた。風曲点迄滑ることが出来たので、充分腰は痛くなり、同時に皆がグリセード好きになる事を誓ひあった。

曲点出合場から両が降り出して来た。三時の列車で帰れる見込がついたのが嬉しいだが、旧道は雪が多量に残っていて苦労した、十二分という超スピードで撤収し、激しくなった雨の中を、前日と比して充実した気分に一応満足しながら駆け下った。（平沢　記）

## 《ミルンゼザッテル越　Bルンゼ》

金木

七月十一日　曇後小雨

土合（五、一〇〇）―一〇〇　登返旧道出合（六、一五―六、四五）―南稜テラス（八、二五―八、三〇）―一〇本谷バンド（八、三五）―ザシテル（一〇、三五―一一、四五）―稜線（一一、三五）―肩の小屋（一、〇〇―二、二〇）―土合（三、四五）

土合に降りると例の通り沢山の人、山の家を素通りして一ノ倉へ向う、旧道出合で朝食を取る、この頃より今にも降りそうな天気が遂に小雨になった。

旧道より一〇〇m位行った所で雪渓にぶつかる、未だヒヨングリの滝は出ていない、左に一ノ沢を渡し、右にシイタテ前沢、シイタテ沢を見送るとエボシ沢のキレイなスラブが眼にうつる、ミユルンドが大きくあいていないのでスラブには簡単に移ることが出来た。南稜テラス迄は水の中を登る、本谷バンドには案内書に書いてある様にアンザイレンを必要とする場所も多くいとも簡単にトラバースする事が出来た、バンドには奇妙な形をした、ブニックや　スノウブリッヂが乱立していた、ミルンゼに入って一〇〇米位進むと　ルンゼは二つに分れる。右するのはバットレスで繰り、左するのは直ぐとガシテルで繰っている、左もとって雨の中を良い気分で登っているうちにザシテルに　ヒヨッコリと顔を出す事が出来たルンゼは急ではあるがボールドスタンス共に　こまかい石がら無数にあり桑に登れるザシテルは晴れていれば気持の良い場所だ、Bルンゼに入ってしばらくして三井銀行山岳部員の死体を発見、去年十一月に消息を断った人らしい、植の小屋でしばらく休んでから西黒尾根を土合へとかけ下りた。

## ▲剱―槍ヶ嶽縦走▼

期日　七月二十三日～八月二日

パーティ　L田中　実、　山田雄孝、岩崎元子

送る者と送られる者との間には歓喜、冗談、旅愁、感激と色々の感情が交錯するものである、「無理はするなよ」「遭難したら探しにいってやるぞ」と様々であるが、ぼくは、旅愁型であるから、どんな言葉も何離い。　ビキニの灰のせいかは知らないが、肌寒い東京を発つ不安も、この夜の盛大な送り客の顔の中に消えてしまったのである、――一夜明けて日本海の荒波こそ壮観であったが、それにも増して、山口岩崎両君の斗志たるや満ち満ちていたのである。

〈七月二十四日〉　午前十時五十七分　富山駅にて山口の従姉妹と別れた我々は、荷物を取附近に預け、食糧等、買物に出る、今日は軽身で私の田舎に赴き夜汽車の疲れも山里で拭う事にした訳である。

〔第一日〕　晴

起床（四、三〇）―出発（五、四〇）―笠津（六、一三）―富山（七、〇〇～八、四五）―岩峰寺（九、三〇～一一、〇二）―乗鞍野（一一、三五～一一、五〇）―藤槍（一二、二五～一、四〇）―昼食―バス―称名駅（二、三五～三、〇〇）―称名小屋（三、二〇～三、四五）―飛龍橋（四、〇五～四、三〇）―滝見小屋（七、一〇～七、三〇）―弘法小屋（七、五〇）―幕営（八、三〇）―就床（一一、〇〇）

夜充軍の不眠も、どうにかぬけて四時半起床――一番列車来車までは、申し分なかったのであるが都会と地方の錯覚、はっきり云えば怠慢から午後三時になって、やっと重い荷をグシト肩に受けて、我に返えったのである、即ち北アルプス縦走の始りである。

乗鞍野で早稲田並みに麦わら帽を買う、　藤橋で荷を計ると各々、九貫、八貫、七貫弱で、はかりに「前途多難」と出る、称名小屋前で岩崎が、呕吐をもよおし大休止をとったが、打診した結果、責任感が彼女を押す、いわゆる「称名の登り」に差しかかった我々もその悪を経験していないので夕日を受けて登っていった、各々「何の因果で山に来た」と自己をいましめていると察した。

私は間隙をおいて登らせた、トシプは岩崎「大の男が私の後でくたばっているかも知れない」と考え自分が以外に元気になるものである、滝見小屋にともかく着いた、滝は見えず行手も見えない　ガルピスのみが煌煌としていたのである、夜道を弘法に急ぎ寂静まった小屋の衆手にコウソリ天幕を張り午後十一時お星様に今日を返上したのである、

〔第二日〕　晴後曇　起床（四、四五）―朝食（六、一五）―出発（九、〇〇）―追分小屋（九、五五～一〇、四〇）―昼食（一一、三五～一二、五〇）―美松坂（一、〇二）―天狗小屋（二、一〇）―地獄谷温泉（三、四五）―夕食（五、四五）―就床（八、三〇）

弥陀ヶ原のなんと印象的なことよ。剣、立山、槍師が屏風の如く立ち並ぶ、秀らしい天候に本格的夏がやって来たることとなる、そが結果、出発が、キヂ打ちを含んで九時となった、　立山の二十貫強が、彼等の遠足でもあるかの様にペチャクチャ云って長い行列を作って歩く我々も追いつ追われる息を切る、　追分のビワの蕾諸が、クリームソーダよりうまいのだから不思議である、大日、奥大日を右手に増々親しみの度を加える山である、弥陀ヶ原は続く、まだまだ平坦に　そしてまだまた美しく。　重荷に対する自己本位の不満を昨日と同様に解消すべく各自のピッチで歩かせる、美松坂は名もいいが、こゝこそ、流石天国なのである、我々も何時間この場を待った事だろう。

天狗小屋の鐘が鳴る「ようこそおいでなすって」を意味する鐘だそうである、つまらない用途を考えたものである。

地獄谷にやってきた　立山が目の前である、そこから降りる山崎カールの時異さ、花崗岩質の山肌は、山を魅する我々だけの讃歌に終るのであろうか、この温泉は日本最高位だそうで、百三十六地獄の形相があるとか、わけのわからぬ、おそろしい言葉である。

ところで我々のパーティは踏みとどまったのである。何故ならばこれ以上無理をさせる状態でないと知った私は、この夜の宿を小屋にとり再起をさして明日からを約束したのである、風呂に入り釜飯を食い、フトンと共にした安楽が必ずや明日の糧になってくれるであろうと信じて。

〔第三日〕　大雨　時々曇

起床（四、三〇）雨激しく行動不可能　朝食（六、〇〇）―出発（一一、一

五）―雷鳥天出合（一一、三二～一一、四〇）―別山乗越（一二〇～一二、五〇）―グリセード練習――剱沢小屋（三〇〇～三一〇）―帰営（五〇〇）―夕食（六、三〇）―就床（九、二〇）

夜半から雨激しく出発は望めないまゝに、つくろいものをしたり、パンを焼いたりして時を待つ、今日は午後三時を限度として別山陵線に幕営地を得る予定である、肉体と自然から阻害された隊員は不安気に外を見つめる、雨がだゝきつけている、熱泥池が噴る、しばし時を過した我々も暫行無事に祈ってガスの切れ間に飛出す。

肉体的苦痛はあっても精神的斗志が今日の行動時間をカバーする事は当然の様である、もくもくと歩く、雨に降られて、カタシムリが雷鳥沢の急登も、ジグザクも沈黙がのし上る、ふと微笑むぬれねずみの顔に小休止を得たのだろう、目を細くして見下すと、ヨーロッパ的な山容に赤い屋根が一つ二つ地獄の噴煙に囲まれて浮出ている『箱庭みたいだな――』と感嘆した時、陵線は最中私の前にやってきた、特に頑んで小屋の横にテントを張った私達に何とも云えぬ歓喜が湧いてきたのである、この陵線こそ剱と穂之私を運んでくれたらうそして　きっと私が選んでやらうと。

小雨勝ちな天候の中をグリセード練習に出る、たくましい剱沢の山男達が夕飯にいそがしい、思い出した様に降ってくる雨に、おぢけて毛布にもぐる、ジャズが天幕をゆらしたかと思ったらシャンソンがローソクの火にのしかゝる、自然が暗闇の中で愛をさゝやく。

〈第四日〉　ガス―晴―雨―強風

起床（四、一五）―朝食（五、一〇）ピスケット少量）―出発（七、〇〇）―剱岳（一一、〇〇）―剱出発（一一、三〇）―剱沢小屋（一、三〇～二、三〇）―B乗越（三、一〇）風雨激し――夕食（七、三〇）―就床（九、三〇）

薪を求める事は不可能に近かったので　ピスケットで朝食を済ます、非常食糧一日分と、ケイ燃十五個が計画外に組まれた食料であるが、食欲は三合五勺をもってしてもなお残る上品と云えば上品、贅りないといえば贅りない人達でもある。ガスこそあるが斗志はそれにも増している、二、三までくると目的に対する欲望が　ひしひし目立つ、悪天候と肉体労疲如何んでは、この縦走を五色ヶ原で打切るべく楽観的観念のうちに最大限の行動を得ようとする態度すら気に付く。

ピッケルとパンを持って陵線を剱に向う、ガスが切れて鹿島槍、爺子の陵線がドス黒く現われてきた、山に対する情熱が、今満たされんとして感嘆するのみである、無用の長物ピッケルをはい松の中に入れ、先を急ぐ同友山口が悪荷から解放された今日こそと、コニカのレンズをぐるぐる廻す、赤いマフラーの岩崎がこおどりする様に岩陵に消えて又出てくる、ボクは、身体の1/16ぐらいのザックを背負ってスタスタ歩く『剱の頂上に何があるんだろう、こんなに楽しそうに』『要するに三〇〇三れあるんだよ』剱岳も、稚拙りに似てぞろぞろ人が列を作っている、空身とは云い昨日迄の疲労と陽気がコントラストとし身体が重い様だ、

朝昼ケンパンしかも昼は水が無しで腹の不平が顔に出る、ともかく先ず剱岳に立つ事が出来た、山をかけずり廻る人間や、山に親しむ人間や、山を真に愛している人間等色々のタノプが頂上で一服したり、記念写真に笑っている、ピントを打つ響きが私の耳を打つ、寒い、とばして降りグリセードで又降る、剱沢小屋で温いミルクパンを食べて、今日の行程は終る。

剱岳往復を甘くみていた私であったが、案外そうでないのにおどろい

た。午後から又も雨が降り始め二十㎜以上の豪雨である、すっかり冷え切ってベースに戻ったが、火がもえつかず、七時小屋で米と飯を支給してもらって夕食とした、猛烈な風にあおられて、おそるおそる毛布に身をうずめ哀れ明日の日を祈って沿寝した。

〔第五日〕 暴風 晴 雨

起床（七、〇〇）岩崎出発（八、三〇）―田中、山口出発（一〇、〇〇）―雄山神社（一二、〇五）―立山頂上（一二、二八）―一の越（一二、四五～二、〇五）

浄土山（二、四〇～二、五〇）―ザラ峠（四、五〇～五、〇〇）―五色ケ原（五、三〇）雨激し―夕食（八、三〇）―就床（一〇、四五）雨暫々激し、

午前一時、テント危険状態に陥し飛起きて遇りに石を積む、雨はほとんど降って居らず、不気味な風のみがおがやかす、悲観的推測で徹収を始めたが、合変らずルーズだ、人通りの多いコースでもあるので岩崎を先発とした、風は合変らず強く耳が痛む霊山は荘厳にして、けだかい、しかし遠足客がそれと対象を成している、一の越で先発、後発共になる、天候は我々幸いしてくれた様でもあるが、雪が許さない、しかし このパーティは、旦て見なかった 好調な足どりで歩いている、一の越からは、その人々が限られた様であるせいか親しみ安く相手が気になる、慈々岳、龍王岳の悪場もトントンたるペースで通過したが、その途中グリセード練習に出た山口が、転落し不慮の失敗をこうむった、カスリ傷で先を急いだ、続いて私達がおそい山口と共に相当に遅れる結果となった、しばらくして突然、中野（東大山岳部）に会い、思わぬ劇的シーンが瞬間的に繰って行く岩崎はすでに三十分の差をもって先行していた、ザラ峠下降で腹をすっかりまひさせてしまった感だ、暮色が五色ヶ原を覆う、小雨がそれにまざる、しかし幕営地にどっかりと腰を下した私は予想外の今日の突破に満足し、ぼんやりした斜面に絶対な私を見出し魂が自然にとけこむ――――

『いよいよ明日が山だぞ』 と云う声は歓喜を生む、激しく降る雨をよそに天幕の中では合変らずのジャズと手拍子がずりずりうなって、食欲をそそっていた、ヨーデルが雨をついて流れる、山を愛するものゝ特権がみなぎって、あまり大きいのである。

〔第六日〕 大雨

起床（六、三〇）―朝食（一〇、〇〇）―出発（一二、三〇）―スゴ小屋（四、五〇）―夕食（六、四〇）―就床（一〇、三〇）

昨夜から今朝にかけて我々は大腸菌を試食したそうである、そして後日、田中は白い自動車に乗せられて消毒息い病院に入ったそうである、これはいつわらざる事実であったのである、スゴ小屋に入る事が縦走を終らせる歓喜にほかならない、 雨は激しく止む事を知らないしずし両脚を重ね十二時を過ぎてしまった。だが、年こうも 歓喜と不安の板挟みの三人はビニールに包まれて足を出した、何がこんなにひきつけられるのだろうか？― やはりスゴ小屋なのだ、黙々として進む、ここに至って解はアルプス縦走路の感を深くする、何故ならば、ほい拡、根、カン木等で相当荒らされているのである、手が凍った様につめたい、誰もしゃべらない、岩崎が足をふみ落す、下に降りて押し上げる遭難譚から しづくが流れている、ビスケットが八枚くばられる、芋を生ら食う、何もかも元気がない。 しかし各自の内に燃える斗志は 彼等の至聖だろうか、

ガスの切れ目にスゴ小屋を見出した我々は痛む様な大粒の雨に悩まされながらも、おどろくほどのスピードで小屋に到達したのである。

幸い単独行の方が大きな火を燃していてくださったので我々は暫く着換え食当りにかゝり　苦しかった今日の行動も久しぶりの豪盛な夕食で吹っ飛ばされた試である、そして又こんな暖かな夜を他にみないはずである。

〔才七日〕晴　雨　曇

起床（四、四五）―朝食（六、四五）―しばらく雨を待つ―出発（九、三五）―昼食（一一、四五～一二、三五）―薬師頂上（二、一〇～二、三五）―薬師太郎最低鞍部（三、五五～四、〇五）―太郎小屋（四、四五）―夕食（六、四五）―就床（九、三〇）

国宿の単独者と九時に別れる、出発が遅く従って到着が遅い怠慢な行動に始終しているが、こゝに一定の行動条件を見出した様でもあるのである、今日も又雨で躊躇する事二時間、九時半出発となった昨日と同じ条件で長頭と云う観念は事更に無い、今日の行程は薬師を越える事だけだったのに何と大きい山だろう、　山容秀麗と云はれる山だから、人間ならば美人なり八等身なりに属する、　黒部病院の向うに赤牛岳が、これ又秀らしい、人が登らぬせいか、いかにも、そのまゝという感じである、郵日五郎　針の木又遠くは剱が全て、この薬師をとり囲んでいると云った感じである、晝は今日も八枚のビスケットで済ます、漸くにして薬師に立った、宗教的名残りの多いわで、祠の廻りに剣がちらばっている、いつしか陰くなってきた筈であるが、ドシト雨を下ろした　ため息さは縦走中外に例をみない、気分に満たされていた、カメラに収まり

立上った過去の尾根を感概深く見つめる我々から夕バコのケムりが幻想をえがいていった『あそこが太郎小屋だ』　と云う梁視から ドンドン先を急いだが降りあきるほど降って、[illegible]の一端に入ったのである、山口が云うには尾瀬にもおとらぬ景勝をもっているそうであるが、山の奥ふかく、そっと隠された草原と云う感じである、五色ヶ原以来ほとんど人にも出合わなかったが太郎小屋補の五人は、きびきびした東京弁で我々をカゾけた。

天候は良く豊富な薪で、食い過ぎたのは今日始めてと記憶する、大自然の真ただ中に私だけがとり残された様な錯覚がタキ火と私の二人にやってきた、みるものは星と風だけである。

〔才八日〕　晴後曇

起床（四、四〇）―朝食（五、二〇）―出発（七、〇〇）―上の岳（八、三〇～八、四〇）―五郎岳最低鞍部（一一、二〇～一一、二五）―五郎岳（一一、五〇～一二、二五）―黒部五郎小屋（二、一五）―昼食（二、三〇）―夕食（五、三〇）―就床（八、〇五）

始めての快晴である、先はみぢかい、一日の遅れをとり返すチャンスと、斗志に燃えている、アルプスとは思えぬのんびりした高原を歩き出した、疲れが出る頃でもあるので案外楽なまゝになり安い、深遠黒部の流れも　その頃実に近づいて、細々と音を継ぐ、雪の平が俗世界を知らぬまゝに静かな日を今日も迎えた、平らな径を三人が実々と歩いてゆく、槍がわづかに　その穂先をみせたかと思ったら、又消えた間に乗クラ岳、木曽の御嶽、右に加賀の白山、左は前迄の黒部原林が黒々と続く、幾は私が過ぎ去った昨日の尾根だ、薬師はあくまで美しい、五郎岳も午前中に通過したが、その下降路は意外に手間取り結局、大事をもって黒部五郎泊りとなった、薪にも水にも事欠かず、[illegible]さふさした花生に手こかを張り残り少い食糧から珍味を出すべく腕をふるった夕食の部前餅こそ私にとって忘れられぬ　うまさ　を提供してくれた、食数も今日はのんびりしたもので火を燃し思い思いに語り

合つた、私も又、この大自然から名文をしぼり出さんと内緒でかがキを書いた訳である、笠岳から雲の平え　この表越を冷たい風が夜を運んでくる、夕日が幻影を我々のテントに写して去つた。

〔第九日〕　快晴―にわか雨―晴

起床（四、三〇）―山食（四、四〇）―出発（六、一〇）―第一ピーク

朝食（六、五〇～七、四〇）―三俣蓮華（九、〇〇）―双六小屋（一〇、三〇～一〇、四五）―昼食（一一、〇三）―槍ヶ嶽（四、一〇～四、二五）―槍沢小屋（六、二〇～六、三〇）―二俣小屋（七、二五夕食～八、二五）―横尾（九、三〇）―就床（一二、三〇）

縦走最後の朝は快晴によつて明けてゆく、テントがずつしり夜つゆにぬれて重たい、カンパンを山々食べて出掛けた、回宿のパーティと、揃つてにぎやかな出発である、笠ヶ嶽が秀らしい。

歌舞だけが我々を進める張な気がしてならない、過去の労苦は一切忘れて来るべき歓びである、岩崎は一人前歩く、山口はカメラでいそがしい、はい松の悪い径を一気に登れば三俣蓮華である、こゝまでくると急に銀座よろしく、人出が多い、ヤシホーも聞える。

槍が一歩一歩その姿を大きくする、天候もどうやら愛聖と云つた感じで足のみが急きたがる、双六小屋で久しぶりにギヤラメルを味つた感高が右手にその雄姿を並べ竜登は、日をみないまゝに、ビす黒い不気味な様　を呈している、昼食時私は深でグリセードを始めたのはよかつたが、そのまゝ二廻転し青色の顔色に今日の行程を不安ならしめた、キスリングを抱えて歩き出したが、みじめである、進まない、岩崎を先に出し、山口とピッコを引きひきあの槍をめざしたそのである、最後の急登がなんとつらかつた事だろう、誰よりも遅れて四時十分　槍の肩に達したのだつた、こゝは銀座、名門、槍はさながら人間のジュズつなぎである、山屋からはスカートがはみ出している、最早昨日見たあの新鮮な空気はどこにもないのだろうか、シリセードで、はしやぐ人々の勝を疲れた足をひきずつて横尾に急いだ、二俣小屋ですつかり暗くなり　しかも雷雨に見舞われ、縦走の疲苦が一気に出て来た様な空虚な状態に落入つたが、寝中電灯をともし梓川の河原をシヨボシヨボと横尾に向つたのである。

キャンプファイヤーの残り火が我々を迎え、少なからざる満足感を得た瞬間でもあつたが、ぐつたりした身体はいかんせん。

お茶を飲んで苦楽の日々を、こんぼりと毛布の中にうずめたのである

この夜の夢は我々に天国を案内してくれました梓川のせゝらぎに銀の船が浮ぶ三人を乗せて　り此アルプス縦走路〃を案内してくれました。

（田中　実記）

## 笠ヶ岳――槍ヶ岳縦走

「パーティ」　福田他現役九名、（リーダー）　京田

「期日」　七月三十一日――八月十一日

七月三十一日　晴

松本市内で先発隊による食糧の買つけを行う、都筑先生宅（一泊）。

八月一日

松本駅にて第二隊と合流上高地へ向う、バスは混乱を極め、上高地到着は正午近くとなる。

小梨平にキャンプを張り、福田他三人が横尾ボシカに向う、徳沢にて帰路田中時利さんに会い、ピッケルを数振り借入れる、小梨平帰着時間は十時近かつた

八月二日

才三隊と合流して、直ちに、帝国ホテル横より中尾峠へ向う、才三隊前夜の睡眠不足が祟り、峠の登りは素晴しく不調、ザックは五、六貫平均、カメラに水筒と云う、いでたちのハイカーに、追い越され、ては、何の因果で山等好きになったものだろうと、つくづく前世が恨しくなる。

何とかして峠に着く、岳には、エネルギーの損失を考慮して、登らないことにする、はるか飛弾側を望むに、一気に蒲田川からそゝり立つ笠ヶ岳のシルエットは、絶対高度、二千米を誇るが如くに、又、飛弾の山の不気味さを示しているかのように我々に感じられた。

しばらくこゝで明日の行動予定を検討する、而して中尾への路を下る、一歩飛弾側に足をいれるや、今までカハイカー達の喧噪は、深山の静寂に変えられた、中尾部落のやつ手前でテントを張る。

八月三日

蒲田川から、はるか標高が連山を伸ぐ、少々感激、クリヤ谷の登りは想像以上の急激さで、ピッチが遅くなる、稜線まで出られる自信もなく、又稜線へ上がってしまえば水場は、笠を越さなければ無いことが明らかであったが、全力を上げて稜線へ向う、岳樺の疎林をぬけるころから空模様が、おかしくなる、気を締めて、最後のアルバイトを終り稜線に出る。

折から降り出した雨の中に、キャムプサイトを探すが、はげしく灰毛岳の尾根に上グラレた、一の倉を思わすような東斜面と、一面偃松に覆われた西斜面とに、キャンプサイトは無く、偃松の間にオカンをする。

夕食はカンパンにコーヒーで済ませる。

八月四日

朝起きると、体中が痛む、再びカンパンの朝食、一人五〇匁づゝ、ガスで笠は見えない、アレートを黙々として笠の登りにかゝる、頂上より、ガスの切目から笠岳小屋の跡が見られた、小屋跡で、雪渓の水で飯を炊いていると、雨が降って来たので、小屋の中に避難と決定したが、そのうち、雨が上がったため、雪渓で滑落停止及び、滑動滑降の練習を行う、小屋は十人を収容出来ないため半分は外にテントを張って寝に就く。

八月五日

標高のコルから出る陽を拝し、行動を開始する、抜戦までのゆるやかな稜線、その間に点在するお花畑と雪渓それに蒲田川側に落ち込む、岩壁は我々の斗志をかきたてる、一登攀やりたいと云う現役をなだめ双六池までピッチを長くして行動、全員よく頑張る。

双六池畔には中大をはじめ、多くのパーティーが集っていた、小屋への連絡によると、O・B級定隊、無事通過とのこと、

八月六日

朝、今にも降り出しそうな様子、やゝ出発を考慮する、憂慮された、西鎌の登りも、みかんの鐘詰の為無事すみ槍の肩に到着、穂先に登るも、視界は零、本日のキャムプサイトを横尾と決定して、槍沢を素通りピッチで下る、二時ごろより暗くなり、新人意気消沈する、横尾でボッカの荷物を受け取る。

八月七日

朝ゆっくりと出発、途中赤沢で下山して来た、田中実さんと途中まで送りに出た田口に会う、涸沢のやや手前で昼食、涸沢に入り、O.Bのテントの隣りにウオールとウイムペーを張る、午後から新集めをして後休養。

八月八日
午前、午後に分け、グリセード練習を行う、
八月九日
パーティを二分して、北尾根と、北穂――奥穂の縦走を行い、夕刻グリセード練習を行う、
八月十日
午前中、北穂沢のゴルジューで、ザイル、テクニックの練習、午後、徳沢へ下る
八月十一日
徳沢より徳本峠を越えて島々へ向う、

福田宏二郎記

# 唐沢生活

期間　八月四日～十日
メンバー　CL田中　SL鈴木　山口　佐藤　成瀬
平沢　福田　山中　亀山　岩崎
装備　テント二（四人用）　その他
八月四日　晴所にわか雨
田中、鈴木、山口、岩崎
正午前に横尾を立つ、横尾谷の橋の所で休みがてら昼食を摂る、雲ゆきが、あやしくなって来たので急ぐ、それでもついに涸沢ヒュッテの手前で降られ一時待機する、雨の晴れるのを待ってテントを張り縦走中の残りの乏しい食糧で晩食を作る、今年の涸沢は去年より雪渓が大きくなってあのコウモリの成長が目立っていた、それがが又の切れ目に夜をのぞかせなつかしい気分を味う。
八月五日　晴
山口さんが東京に帰る、うらやましいかぎり、縦走中の疲れが取れず昼寝をしてすごす。田中さん鈴木さんはグリセードをする　夕方成瀬さんが涸沢に入る、ようやく食糧の補給がつき一安心　そろそろ月がきれいになって来た
八月六日　晴
やっと天気が落ちついて来たらしい、朝テントの中に居ると熱くてむされそう、今日は山中、亀山両嬢の御着きの筈、鈴木さんと二人で横尾迄下る、田中、成瀬さんは北穂へ行く、横尾近くまで来ると私ノにはいが新鮮な香りをはなっている、十時前に着きぶらぶら　時迄待ってその間昨日成瀬さんが小屋にあづけて行った食糧と三つ道具をまとめる　時に亀山、山中さんと現役の田口さんが無事到着し談がはづむ、荷物を等分（但し鈴木さんは例外）しお子三人はゆっくり歩き出す、田口さんは今日現役が穂高一回をして着く予定なのでしばらく残る、途中横尾谷の橋でいつもの通り一休みする、この頃になって鈴木さんの調子が悪くなり涸沢迄来た時にはずっと遅れてしまった。夜になると今朝途中で会った早稲田の平沢さんが遊びにいらっしゃった、今夜から月がつり尾根にかくれる迄ねない事にする、ちょうど金儲を真二つに割った様な月であった。
八月七日　晴
以前から不調の調子が悪かったリーダーの田中さんが大事を取って下山する、リーダーは鈴木さんに変る、全員ジャンダルムに行く、ザイテングラードを標準時間でモクモクとのぼり穂高小屋で一休みして奥穂を通過して口バの耳の手前迄行く途中乗鞍のけい古をしたり、

機械体操をしたりしながら、そこで私達尾根をやる鈴木さんと成瀬さんと別れ又山中さんは食当の都合で引返す、亀山さんと私はそのまゝ主峰に向うようやくの思いでたどりつき明日の御味噌汁の実に岩たけを取り帰途に着いた、この日一日遅れて現役が全員無事に酒沢に入って来た、夕方佐藤さんが表銀座からやはり酒沢に入る急に、やかになる

八月八日　晴

鈴木、佐藤、山中、亀山さん達は北穂東陵、穂高小屋、ザイテン成瀬、岩崎は前穂北尾根、福田さんは現役のグリセード指導の為それぞれ出かける。

成瀬、岩崎組は、ザイルを持って六時半にテントを立て、五六のコルから前穂に向う、コルの上に立つ、始めて見る奥又白の岩が足下にみえ何となく武者ぶるいがする、五峯は難なく通過し、四峯の直登を試みたが上がハング気味なので巻く、この頃から自信を失い気味で東陵組がうらやましくなる、三峯に分ると詰ってしまい、よそのパーティの人にジッヘルしてもらう始末である、そのあとは無我夢中とは何とだらしのない事か。

レシリ尾根を経て奥穂ザイテンを下る、成瀬さんは本沢をグリセードで下った。

月が青味を帯びさびしい迄に光っていた。

八月九日　晴

成瀬さんと岩崎は北穂　東陵　北穂南陵　佐藤さんは奥穂ジャン、鈴木、山中さんはグリセード亀山さんはテントキーパー

私達は南陵へ行く道をダムの手前で東陵に向いガレをガラ〳〵と登る、そしてはい松の尾根にとりつき、はい松ととりくみながら昨日より楽しく登った、北穂の小屋から十日前に運った薬師がはつきりとながめられた、昼前にテントに着いたらお客様がおいでになって御菓子をパクついていらしやった、午後は平沢さんが加りグリセードの指導をした、夜は酒沢で前後十三夜位の月見をした

八月十日　晴

午前中にテントを撤収し徳沢へ下つリコンパの支度をする。平沢さんと福田さんは現役の岩場での指導で遅れる。

西明苅二年度役員

代表　CL　田中將刑
SL　田中実
〃　平沢勇
会計　中野英司
庶務　鈴木輝夫
器具　山口雄幸

# 會員名簿

| 氏名 | 番号 | 卒業年度 | 勤務学校名 | 会務 | 住所 | 電話 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 長崎正明 | 1 | 廿六 | 慶応大学法学部 | | 中野区本町通五ノ二一 | |
| 〃 | | | 〃 | | 〃 大和町一八〇 | (38) 〇八七五 |
| 田中將利 | 2 | 廿六 | 早稲田大学政経学部 | | 杉並区馬橋二ノ一五〇 | |
| 田中実 | 3 | 廿六 | 中央大学文学部 | 〃 | 武蔵野市吉祥寺一九ノ一 | |
| 平沢勇 | 4 | 廿六 | 早稲田大学理工学部 | 〃 | 渋谷区千駄ヶ谷一ノ五五三 | |
| 森沢拓治 | 5 | 廿六 | 〃 | | 杉並区和泉町一四八 | (32) 〇五七二 |
| 中野英司 | 6 | 廿六 | 東京大学文一 | 会計 | 中野区仲町一三 | |
| 笹田英次 | 7 | 廿六 | 日本大学工学部 | | 吉祥寺区北沢二ノ一九二 | |
| 鈴木輝夫 | 8 | 廿六 | 武蔵工大 | | 杉並区松の[illegible]一一九六 | |
| 山田昭 | 9 | 廿四 | 朋文堂勤務 | 庶務 | 〃 荻窪二ノ二一六 | [illegible] |
| 成瀬雄 | 10 | 廿七 | 早稲田大学理工学部 | | ~~杉並区荻窪二ノ一五二 (39) 四五一二~~ | |
| 山口雄幸 | 11 | 廿六 | 慶大法学部政治科 | 器具 | | |
| 岩崎元子 | 12 | 廿八 | 荻原技芸学校 | | 〃 大宮前二ノ七一一 | |
| 山中富佐子 | 13 | 廿八 | 第一銀行吉祥寺支店勤務 | | 武蔵野市関前八八二 | |
| 福田宏二郎 | 14 | 廿八 | 農工大学林学科 | | 杉並区久我山三ノ九七 | |
| 亀山敏子 | 15 | 廿八 | 実践女子学院 | | 武蔵野市吉祥寺二七六九 | (ムサシ) 三五七二 |
| 伊藤弘美 | 16 | 廿八 | 大正海上火災本社勤務 | | 杉並区高円寺六ノ七五四 | (八王子) 一一三六 |
| 佐藤信治 | 17 | 廿六 | 中央大学 | | 八王子市本郷町二〇 | |
| 加藤鈴夫 | 18 | 廿七 | [illegible] | | | |
| 西本徹 | 19 | 廿六 | 早稲田大学 | | 新宿区西大久保三ノ三一〇 | (35) 〇四六五 |
| 岩波義之 | 20 | 廿八 | [illegible] | | 千代田区神田金沢町一二 | (25) 四八七二 |
| 松田朝夫 | 21 | 廿六 | [illegible] | | 杉並区大宮前四ノ五〇九 | |

山田 22
若野 23
竹田 24
橋 25
星 27
渡辺 28
関谷 26
川口 29

中央大学
会社員
早稲田大学法学部
浪人
早稲田大学
医学部
浪人
早稲田大学商学部

西明報告第四号
発行日 昭和三十九年十月二十三日
編集者 岩崎元子 山中富佐子
発行者 西明登高会
（中野区大和町一八〇田中方）